26PB-pm298

「患者から望まれる剤形」の調査

○林 良行[1], 水村 亮介[1], 糸井 彩乃[1], 伊藤 護之[1], 杉本 修[1], 岸野 亨[1]（[1]埼玉医大病院薬）

【目的】現在日本国内では、患者のニーズに応じ様々な剤形の医薬品が市販されている。一方で、剤形上の理由からアドヒアランスの低下を誘発してしまっている事例を経験している。今回我々は独自のアンケート用紙を作成し、患者にとって服薬する際にどのような剤形が最も望まれているか調査を行った。

【方法】2016 年 9 月 15 日から 1 週間、埼玉医科大学病院に入院中の患者を対象としてアンケート調査を実施した。

【結果】飲みやすい剤形として「錠剤」との回答が 70%以上を占め、水剤、散剤と回答した患者は少数であった。大きさについては、大きすぎると嚥下障害を引き起こし、小さすぎても取扱いに支障が生じるという回答が多数であった。形は球形の錠剤が懸念される傾向にあり、円形よりも楕円形が取扱い易さから好まれる傾向にあった。また、用法に関しては 1 日 1 回の服用が最も望まれており、1 回の内服数は 5 剤までであれば概ね許容される傾向にあることが分かった。今後患者が期待する剤形としては「ゼリー製剤」、「アイス製剤」、「飴製剤」、「ガム製剤」などがあり、味については「バニラ味」、「チョコレート味」、「ミント味」、「柑橘系の味」などを期待しているとの興味深い回答が得られた。

【考察】薬物治療において服薬の可否が治療効果に大きく関与しているが、剤形の選択は患者のアドヒアランスに影響する要因の一つとなりうる。服薬の際、小さければ良い、散剤にすれば良いという意識と、実際の患者の要望の間には少なからず相違があると考えられた。患者個々に合った適切な医薬品とその剤形の選択が、アドヒアランスの向上と効率的な薬物治療をもたらし、さらには副次的に拒薬などによる薬剤破棄を減少させ医療費削減に繋がっていくと考えられた。